《CEL SERIES》

大阪再発見 Vol.2

written by Tomoyo Kurimoto 栗本 智代

中央卸売市場で行われているセリの風景

石畳の残る路地

第11回 野田・福島

昭和のぬくもりを再生産するまち

福島区は、大阪市の西北部に位置する。JR環状線で大阪駅より内回りに乗ると「福島」「野田」と続く駅々の界隈、と言った方がわかりやすいかもしれない。

古代の大阪は上町台地を除けば入り海で、その後徐々に海面が低下した時、福島あたりは湿地帯となり、葦の茂る浅州や島が無数にあった。難波八十島と呼ばれ、歌島、姫島、鷺洲、海老江などの地名がその歴史を物語っている。「福島」の地名については、もともと地元民が「餓鬼島」と呼んでいるのを、菅原道真が筑紫（大宰府）への左遷の折に、将来の幸いを願い「福島」と名前を改めさせたという伝説がある。漁村として発達したが、その後、だんだんと農業を主とするようになった。

明治以降、大阪開港にともなう馬車鉄道や国鉄、阪神電鉄の開通、また中央卸売市場の開場などにより、近代大阪の拠点として発展した。現在は、国道2号線、JR環状線や東西線、地下鉄、阪神電鉄など縦横に整備されて非常に便利な上、近年は幹線道路沿いを中心に再開発の波が押し寄せているが、庶民的な町並みや気風が根強く残っていることは意外と知られていない特徴である。

今回は、そんな人やまちのぬくもりを改めて感じさせられる小旅行であった。

聖天通り商店街での賑わい

そばと落語の会

石畳と路地のまち

石畳のある家並み／野田5丁目

トンネルの路地／野田2丁目

野田・福島界隈では、もともと井路川の水路が張り巡らされていたところを埋め立てて道にしている。そのため、曲がりくねった迷路のような路地が現在でも数多く残っており、タイムスリップしたような町並みが続く。

例えばJR環状線の「野田阪神」駅から南西方向へ、野田二丁目～五丁目あたりを歩くと、路地にもいろいろな表情があり、石畳が敷かれているものやトンネルになっているもの、階段があるものなど、昔ながらの風情がある。長屋や蔵、立派な卯建（うだつ）のあがっている町家もよく見られる（卯建というのは、江戸時代の民家で建物の両側に張り出した小屋根つきの袖壁のことで、身分を象徴する装飾であったが防火の機能も備わっていた）。路地にはお地蔵さんがいて、どこもきれいに清められて大切にされているのがわかる。野田五丁目にある源吉大明神という狸さんは、もともと対込町に祀られており、戦時中の火災が少なかったのはこの狸さんのお陰だとされて、移動後、現在も「火の神」さんとして大切に地域の人々に守られているという。

「源吉大明神（げんきちだいみょうじん）」という狸さん

卯建のあがっている古い町家も少なくない

お地蔵さんも多い

野田藤

福島区を歩くと、公園などを中心に「藤」の花のマークがよく目につく。

現在の玉川4丁目（JR野田阪神駅より南東に数分歩いたあたり）に春日神社があり、その付近には古来より藤が群生していた。ここに足利義詮、豊臣秀吉などが訪れ、藤を愛でたと伝えられ、藤の名所として、吉野の桜、高雄の紅葉と並び称される時期もあったという。江戸末期に出版された錦絵・浪花百景の中でも取り上げられている。

「野田藤」という名前は、明治になって植物学者の牧野富太郎博士が命名したことによる。一般に見られる藤は「ヤマ藤」で、つるが左巻きなのに対し、野田藤は右巻きで、花房が長いのが特徴である。明治以後、野田藤は徐々に衰え、春日神社も焼失したが、愛媛県宇和島の「天救（しゅく）園」に野田藤が繁殖していることがわかり、昭和45年頃から、地元の人々や大阪福島ライオンズクラブの働きかけで、この苗木を入手することができた。福島区の公園や校庭、区役所、春日神社に次々移植したことで、野田藤の再生が実現し、現在では区内各所で野田藤を見ることができる。現在、大阪市顕彰文化財に指定されている。

野田の藤跡

中央卸売市場
機能的かつ開かれた市場へ

中央卸売市場内

創設は昭和六年。それまで隆盛していた天満青物市場、雑喉場魚市場、靱海産物市場を中心とした十二の市場がその歴史を終え、大阪市営の中央卸売市場の開設となった。

建設用地は千トン級の汽船接岸が可能で、貨車の引き込み線整備にも都合がよいと、安治川北岸一帯が選ばれたが、予定地には住友伸銅所、住友倉庫、下福島小学校など大規模建造物や民家約四百五十戸が密集しており、用地買収と建物除去にさまざまな困難が生じたという。これらを克服して、昭和四年七月に本格的工事に入り、昭和六年三月に竣工式、十一月に開場となった。

以後、大阪市民の台所としての役割を果たしてきたが、その後、場内狭隘と混雑打開のため、一二二〇億円の費用（三分の一は国の補助金）と十四年の歳月をかけ、改修と再整備を行った。平成元年度から業務管理棟（地上十六階、地下一階）を建設、完成後は市場棟・関連棟の建

セリの様子

て替え工事を行い、平成十四年十一月に、新市場が完成した。こうして、生鮮食料品の搬出入がスムーズにでき、市場衛生機能の向上をはかるための施設整備や情報化などが実現。立体構造では全国一の施設規模を誇る新市場が誕生した。魚、特にマグロの温度管理が徹底し、特別低温売り場でのセリが可能になった。一日七十トン出るというゴミも廃棄システムにより処理できる。

この整備にともない、集客観光施設としてのあり様も検討され、その具現化に前向きに取り組まれている。これまでは卸売市場の機能や役割について、一般市民には知られていない面が多かったのを省みて「開かれた市場」をめざし、見学者用の施設が新たに設置された。業務関連棟には、研修室や資料室、文化教室、料理教室、レストラン街もある。市場棟には、二階・四階に見学者通路を設け、黄色のラインでルートが示されている。そこには見学者自動案内システムとして「しゃべる案内パネル」（日本語・英語）が置かれている。一階は、大量の食材の搬入がかなりスピーディに（荒々しくも）行われているのを、安全な二階から見下ろすかたちである。関連棟には、資料展示コーナーや多目的ホールもでき、魅力的な観光施設になっている。実際セリの現場を案内し

品質の順にずらりとみかん箱が並ぶ

てもらうと、卸業者の方々がほとんど手で会話をしていて、何を言っているのかさっぱりわからない。が、次々誰が何を買うのかが決まっていくようだった。一階に降りてそばで見ていると、仲買人のおじさんがにこにこしながらやってきて、「同じりんごでも、色つやが違うやろ。大きさの違いでも値段がだいぶ変わってくるんや」、「ええもん（高品質のもの）から決まっていくんやで」と、見学者にも気軽に声をかけてきて細かく解説してくださった。

セリの時間は、フグが午前三時半頃、マグロが四時頃と、見学をしようと思うとかなりの早起きを強いられるが、青物や果物は九時頃からはじまるので、何とか足を運べる時間帯だ。実際、小中学生の社会見学のほか、海外からの視

セリを終えた果物屋さん（右）が、見学者に気軽に話しかけてきた

賑わいの場づくり

新たに設けられた資料展示室

察ツアー受け入れも多い。ホームページ上などで市場見学や料理教室などツアーへの参加を募集しているが、それ以外でも五人以上集まれば、希望日に案内してくれる。

今後は、中之島西部との界隈性や水辺を意識した船運からのアプローチなど、周辺部分とつなげた観光ルートの開発が必要であろう。大阪の食文化の情報発信基地としての卸売市場の魅力をさらに対外的にアピールし、大阪における代表的な集客施設としての可能性をさらに開拓することが望まれる。

聖天（しょうてん）通り商店街

聖天通り商店街は、JR大阪環状線福島駅から北へ数分歩いたところにある。なにわ筋から聖天了徳院筋にいたる東西三三三メートルほどの通り。聖天了徳院とは、真言宗東寺派の寺院で歓喜天を祀っており、昔から浦江の聖天さんと呼ばれて親しまれ賑わったという。

聖天通り商店街

商店街はその参道にもなっているが、一年前より、毎月第四金曜日、「売れても占い商店街」と題した催しにより、若い女性やカップルが押し寄せてそれはすごい人出になる。まさに「占い」イベントだが、第四金曜の占いデーには、二十～三十名の占い師が商店街の路上に机を並べ、特別料金の千円で見てくれる。この予約券を求める人がずらりと列をつくるのだ。夜の十一時頃まで人出が絶えず、占い師さんの方がクタクタになるとか。周辺のお店は、占いの待ち時間にお客さんにさまざまな特別サービスを用意している。占い予約券を見せると、占いマークが表示されたサービス提供店で商品が割引になる。

聖天了徳院

占いにちなんだ関連商品もユニークである。例えば、精肉屋の大吉コロッケ、履物店では、「あした天気になーれ」と題した下駄占い、その他、ラッキーカラー開運カーテンや、五行易開運ネクタイ、開運たこ焼きなどがあり、よく売れているようだ。人気のたこ焼き屋さん「開運だこ」は、それまで喫茶店の副業だったたこ焼きが今では本業になってしまったと聞く。

「占いの町づくり」を中心となって進めた草野則一さんにいきさつをうかがった。この商店街では、約十九年前から一年に一～二回の頻度で、手作りの夜店フリーマーケットなどのイベントを開催していたが、他の日との落差が激しく、商店街活性化の根本的な解決策にはならなかった。しかし、近年の環境変化で駅前周辺が賑やかになってきたのも契機となり、平成十一年に、商店街を振興組合として法人化し、若者も意識してコンセプトを"UFO＝遊歩"として、街路灯やアーチを新設し、"カラー舗装しなおすことで、イメージ

草野 則一 さん

「売れても占い商店街」と書かれた幟があちこちに見られる

福島てんこもり　～わが町まるごとガイド～

福島には、福島住民のための福島住民による地域情報雑誌「福島てんこもり」がある。

A5サイズ、40ページ前後の薄い雑誌であるが、主婦の目から見た地域や生活の生情報が活き活きと綴られており、現在10号まで出ている。

発刊のきっかけは、大阪市立福島図書館が企画した「編集講座・わたしの好きな福島」である。これは地域の住民を対象に、地域情報誌を執筆編集してみようという講座だ。数十名が自由に福島区内を取材し、「福島てんこもり～わが町まるごとガイド～」と題して一冊にまとめたのが、1995年の1月のことである。ただ、福島図書館が印刷費用などを負担するのは1号だけで、編集講座は終わってしまった。それで、この講座生の一員であった大西俊子さんを中心に、気の合うメンバーが10人集まり、雑誌づくりの活動が継続された。大西さんの知人で文筆家兼コピーライターをされている方が創刊号を見られて、「こんな面白い雑誌ほかにはないわよ。ぜひ続けなくちゃ!」と励ましてくれたのが理由だそうだ。

その10人の女性は、年代も60代から30代まで幅広く、仕事をもつ人も多かったが、1年に1号のペースなら発行できるだろうと再スタートが切られた。「そうはいっても、資金ゼロでしょう。広告をとってきたり、ガレージセールをしてみたり。さらに、メンバーが、毎月お茶代程度を出し合ってマイペースで発行しようという結論になりました」と言う大西さんは、証券取引所で働いておられた時、お金の世界の浮き沈みや汚さも見尽くしてきたため、定年後は、お金儲けは考えないでいいように（一応定価は付けてあるが）ほとんどが手配りされている。

お世話役の
大西 俊子 さん

「隣の人が気持ちよく暮らし、元気になる本をつくりたい」、「本の題字やイラストを中学から大学までの学生さんたちに書いてもらったり、若い方々を一緒に淀川に連れていってあげたりしていると、皆さんの表情が明るくなっていく。年寄りが若い人にどれだけ教えてあげられるかがテーマの1つです。私たちも若い発想力をもらえます」。

そのような活動の雰囲気を反映してか、誌上には、主婦の目から見た地域の情報が、だれに遠慮することもなく綴られており、それが面白い。例えば、公園で子育て真っ最中であるお母さんの生の声を拾ってきてそのまま掲載したり、あるいは子供のアトピー、親の介護や脳卒中体験、健康でいるための秘策あれこれや、おばあちゃんの生活の知恵、また近所で売っている洋菓子店のプリンを30種類以上食べ比べるなど、日常生活の深刻な問題から些細なことまでが、堂々と取り上げられている。一方で地域の歴史も丁寧に語られており、エリアごとに地図で紹介している。神社やお地蔵さん、昔ながらの道や家並み、建造物など、写真やイラストでわかりやすく解説しており、淀川の自然を見直そうと足を運んだ体験記も新鮮である。

福島というまちは、路地や長屋が数多く残っているが、昔ながらのコミュニティも健在で、例えば、隣の子供が「おかあちゃん買い物行ってカギ開けへん。おばちゃんトイレかして。我慢できへん」と気軽に頼むような関係らしい。泥棒もほとんど来ないと聞く。最近、特にマンション族などは、なかなか近所の年配の方に生活の知恵を教わる機会がない。自分がじっくり住んでみたいまちに、こんな地域情報誌や参加しやすい活動があれば、どんなに生活が楽しくなるだろう。

「孫やひ孫の世代になっても、まちの歴史や生活について、この本から何かを書き写す機会があるかもしれない。インターネットのホームページでは、将来、たぶん消えてしまう。だから、雑誌にこだわっていたい」。次号はどんな話がてんこもりになるか、待ち遠しい。

毎月第4金曜日「占いデー」の賑わい

を一新した。さらに、平成十四年の春、大阪市の助成を受け、商店街活性化のためのコーディネート事業として、コンサルティングの専門家と一緒に企画立案をはじめた。インターネットのホームページを立ち上げる過程において、「商店街の"売り"となる何かが必要だ」と気が付き、"提案されたのが「占い」であった。

実は七～八年前、夜店で一日だけ占いコーナーを設けたところ、予想以上の反響だったが、常設として本物の占い師を呼ぶと予算的に無理があるため、立ち消えになっていた。しかし、コーディネート事業で改めて取り組めば金銭面は何とかなるかもしれないと、インターネットなどで実績のある占い師を探し、商店街の事情をさらけだして話をしたところ、二十一名のプロが安価で引き受けてくれたという。まちの賑わいを演出する意味でも屋外で占うことにし、またネーミングも「売れても占い商店街」、大勢の占い師が集結する第四金曜日を「売れても売れても占いデー」とした。チケットやチラシ、立て看板もすべて手作りで準備し、平成十四年八月に、第一回目の本格的な占いイベントを開催したところ、七百八十人ものお客さんで賑わった。その後、熱のさめないうちに、商店街の中の空いた部屋やスペースを利用して「売れても占い金曜館」として、毎週金曜日数人の占い師さんが活動している。この七月からは、毎日営業する「特命館」もオープンし、十月からは、一般の人も占いを学ぶ「占い大楽(学)」も開講している。

草野さんは、「実は、聖天さん(聖天子徳院)は占いと関係が深いのです。易相の大家である水野南北が、青年期に院主の諭しによって大成し、熱心な信者になったということが、準備計画中に判明したのです。水野南北といえば、現代の占い師では誰もが知っている。これにあやかろうと思いました」。聖天さんの参詣道として発展した商店街にとって、大きな後ろ盾である。参詣者だけで賑わうことはなくなったものの、縁日的風景を演出する取り組みにより、歴史や伝統と現代的・文化的なイメージをともに反映させつつあるのではないか。今後、修学旅行生の体験学習受け入れ先になる話もあるとのことで、大阪の名所としてさらに注目を集めそうである。

やまがそば、そばと落語の会

阪神電鉄野田阪神駅から徒歩数分のところ、高架下に「やまがそば総本家」というそば屋がある。そばの美味しさでは近所でも定評のある店だが、二十五年前から、落語の寄席として注目されている。その名も「おそばと落語の会」。毎月第三月曜の十八時半から開演している。

二階へ案内されると、襖やテーブルが取り払われた宴会場に座布団が敷き詰められ、何十人ものお客さんが、高座を緩やかなコの字型で囲むかたちに座って待ちかねている様子。カメラマンがレンズを構えると「取材でっか。新聞？雑誌？」と、初老の男性がわが子を取材されるかのように、ニコニコ話しかけてきた。この日は、笑福亭三喬さん、遊喬さん、右喬さん、生喬さんの四席。先月のこの席で冷や汗をかかれたという若い落語家さんは、「今日は大丈夫、しぶく決めます」などと枕でふって、常連さんを中心にうけていた。五十人も座ればいっぱいになるほどの小さな空間なので、落語家さんの表情や声色が手にとるようにわかり、つぼも飛んでくる。トリの

やまがそば／外観

三喬さんの「一人酒盛」でじっくり話芸を味わった後は、大喜利勉強会。「○○とかけて、△△と解く…」というあれである。お題を客席から募ったりして、時事ネタも飛び出し、それぞれの落語家さんのキャラクターが浮き彫りにされる。名前を聞いたことのない若い噺家さんでも親近感が生まれ、応援したくなる。

寄席の後に待っていたのは、なんと「松茸そば」。毎年十月の恒例になっている。「一度だけ、松茸一キロが五万円以上した年には、しめじに変わったけれど、今年はたっぷり入ってます」と店長。贅沢に松茸が浮かぶおそばとだしがたまらない。隣に座っていたご年配の男性が麺をすすりながら、「落語家は、年期をつまないと味が出ないですねえ」。上本町から電車を乗り継ぎ毎回通っているそうだ。「そばも楽しみでねえ」。寄席の興奮からか熱いそばのせいか、初対面の人とも気楽に話せる雰囲気ができていた。

この通称「そばの会」の世話人は、やまがそば店長の東條利通さんである。知人が笑福亭松鶴の後援会に入っていた関係で、落語会にお弁当を提供することになった。それが縁で、「勉強するための寄席がしたいが、場所や機会がない」と若手が話すのを聞いて、自分の店でそば付きの勉強会を開くことを思いつき、松鶴師匠にお願いしに行ったという。当初は、笑福亭鶴三(のちの松喬)さん、松枝さん、呂鶴さん、後から松葉さんという落語家メンバーであった。三年目、十年目の区切りには、六代目松鶴さんも挨拶に来られ、笑福亭の忘年会もこの店で行うようになったという。「最初の数年は、お客さんも少なくて十人か十五人の時もありました。でも、勉強会だから続いたんですね。こちらも"変わりそば"として、通常では出さない新しいメニューをいろいろ考えました。地方に行って研究して、『ささ切りそば』といって笹の葉の粉を練りこんでみたり、『日中友好そば』と題して、とりがらラーメンだしにしてみたり…。お客さまの数に関係なく材料を準備しますので十年間は黒字になりませんでした。最近では毎年年末に、翌年一年分のメニューを考えます」。なるほど、落語会のプログラムしおりの裏に年間のそばメニューがある。三月かき揚げ桜そば、六月蛍そば、十一月、晩秋そば…、やっぱり中身は当日のお楽しみである。

東條 利通 さん

笑福亭 三喬 さん

落語会のお客さんの数が四十～五十人に増えるまで十年かかったそうだが、二十周年を契機に、落語家さんを若手に切り替え、笑福亭三喬さんを中心に今日まで続いており、すでに三百回を越えた。今年からは、笑福亭だけでなく他門からも勉強会に来られているそうだ。三喬さんは、「私は内弟子時代、ここでアルバイトをしていて、三年目の頃からこの勉強会に出ていますが、このそばの会は、今では大阪の中でも一番古い寄席の一つです。阪神電車が通る音がまともに響くので、笑わせたい時を電車音とうまくずらすのがポイントです(笑)」。なかなか高度な技だ。「若手に交替してから、最初は確かに大変でした。それまでは、通のお客さんが中心になった笑福亭の会員制クラブのような面もありましたが、若返って福島区の落語会という感じになったんですね。最近は、福島区在住の桂む雀や桂こごろうにも声をかけてきてもらっています。雰囲気も明るくなって、お客さまも

若手落語家の勉強会は、とてもあたたかな場である

大阪を代表するアーバンビレッジ
～ぬくもりの再生産～

あたたかく受け止めてくださるので、私たちも実験したり稽古したりしやすいです。そして、最後におそばが待っているのでトリが楽です。おそば、本当に美味しいでしょう」。

ここは、落語家さんにとって、ホームグラウンド的な場所だという。常連の応援団に支えられて頑張っている落語家さんや特別仕立てのおそばから、あたたかい気持ちにさせられ、たくさんの元気をもらえた。

JR「大阪」駅西側の西梅田地区開発の「オオサカ・ガーデン・シティ」ができてから、西へ西へと開発が広がっている。その中で、平成十一年、「福島」駅（JR環状線・阪神）前に新阪神ホテルがリニューアルオープンし、マンションや店舗からなる大規模なビルが出現した。こうして福島の東端は、ターミナルシティであるキタ・梅田の繁華街的な色合いを強めてきた。新しいイタリアンやフレンチのレストランが複数の有名雑誌に取り上げられ、JR東西線ができて便利になったことも手伝って、訪れる若い人が増えている。しかし実際には、「福島」駅近くでも、大通りを渡り一本筋を入ると、昔ながらの路地が入り組んでおり、古きよき時代の下町風情が残っている。神社も多く、夏祭りの賑やかな地車囃子が風物詩となっている。まさにアーバンビレッジという表現がぴったりだ。さらに野田まで入り込むと、戦災を免れた昭和初期のまちなみが色濃く残り、そこでの生活を通して昔ながらのぬくもりが世代を超えて引き継がれ、再生産されている。

この地域を知れば知るほど、地の人が地の「らしさ」を大切にしている場所だと感じさせられた。野田・福島という都心で営まれる手作りのスローライフを通して、私たちが何を失いかけているのかを教えてもらえたような気がした。CEL

JR福島駅前の「新阪神ホテル」

（大阪ガス エネルギー・文化研究所 研究員）

主な参考文献

『福島区史』
福島区制施行五十周年記念事業実行委員会 平成一二年

『本場開設七〇周年・新市場完成記念 新たな飛躍に向けて』
大阪市中央卸売市場本場 平成一四年

『写真で見る福島の今昔』
福島区役所 平成五年

「ふくしま見どころ・てくてくガイド」
福島見どころめぐり区民ウオーキング実行委員会編 平成一三年

「わがまち史跡めぐり」
福島区役所企画総務課 平成一三年

「大阪春秋」八〇号（野田・福島）

「ふくしまてんこもり」一～一〇号

「大阪人」VOL56、VOL57
大阪都市協会

他